

特集 大雪と気象 【インタビュー1】

平成24年度 札幌市の大雪と除排雪
限られた除雪予算と機械を活かす
市民とのパートナーシップ

平成24年度、札幌の累計降雪量は6mを越え、近年の平均値を2mほども上回った。
世界でもまれに見る雪の降る大都市・札幌の除排雪について、その現状や対応、課題などを伺った。



札幌市建設局 雪対策室計画課 課長 山形文孝氏

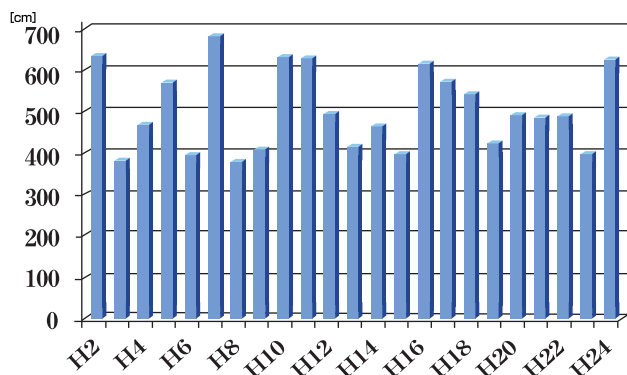


札幌市建設局 雪対策室事業課 課長 高橋 章氏

■ 史上初めて初雪が根雪に

平成24年11月、札幌ではなかなか初雪が訪れず、市民に雪の少ない、すこししやすい冬を期待させた。ようやく札幌に初雪が降ったのは18日。平年よりも21日遅れ、観測史上2番目に遅い初雪だった。その後、初雪は一度も解けることなく根雪に。初雪がそのまま根雪となるのは観測史上初めての事態であった。

この冬はここからさらに断続的に雪が降り続けた。12月の降雪量は212cmとここ10年で最も多く、年を越した平成25年になっても雪の勢いは衰えず、3月にも大雪が続いた。降った雪の多さに加えて、平均気温が低かったことも大雪の印象を強めた。札幌の3月下旬の旬平均気温は平年2.3℃に対して平成25年は0.6℃。気温が低いために雪が解けない。そして、この冬の累積降雪量は628cm。過去5か年の平均値458cmを大きく上回るこの大雪に対して、札幌市はどのように対応したのだろうか。



▲累積降雪量の推移 (札幌管区気象台)



▲旬平均気温 (札幌管区気象台)

■ 市民からの苦情が2倍

札幌市内の除雪は、国道の除雪を国が、道道・市道の除雪を札幌市が、担当している。札幌市が担当している道路の除雪延長は約5,400km、年度の除雪予算は約150億円に達している。

札幌市の除雪は、「マルチゾーン除雪」という体制を取っている。これは広大な札幌市では地域によって雪の降り方もさまざまであり、地域に即した除雪を行うため市内を23のゾーンに分け、その各々に除雪センターを配置し、除排雪作業にあっている。除雪業者はマルチJVとしてゾーン内の除雪を行うほか、夏場も同じゾーンの道路維持業務に携わる。地域に精通した業者であれば、除雪作業を効率的に行うことができる。また夏場に道路の維持管理を通して事業量を確保することは、事業者が除雪機械や人員を維持する助けにもなる。

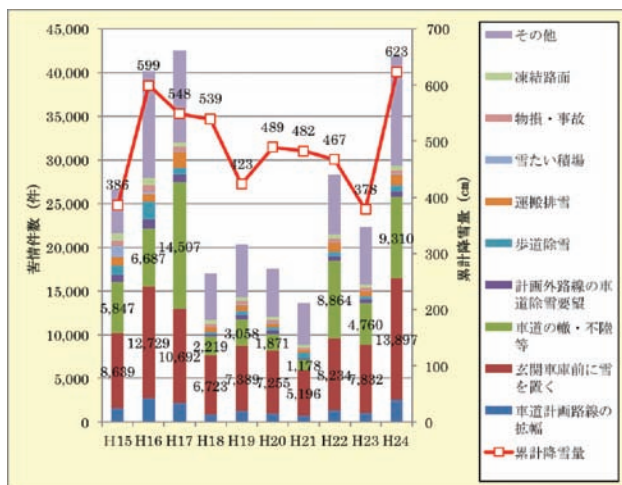
しかしこの冬、札幌市の除雪はまさに多忙を極めた。

札幌市では、おおむね10cmの降雪で除雪作業を開始することになっているが、この冬は除雪してもすぐに新たな雪が降りつもり、除雪の跡が見られないとの苦情や、早く除雪をしてほしいなどの要望が数多く寄せられた。

札幌市が集計した除雪作業にかかわる苦情要望件数は、平成23年度が22,301件だったものが、平成24年度には41,877件と倍近い件数となった。

札幌市建設局雪対策室事業課 高橋章課長は言う。「大雪に除雪が追いつかず、市民から多くの苦情が寄せられましたが、札幌市では全域で同じように雪が降るのではなく地域差があります。この冬も雪の少ない区の機械を雪の多い区に融通するなどの対応を取りましたが、全市的に大雪であったため対応に苦慮しました。また、景気低迷により事業者のトラック台数が減っていることは幸い当市の除雪には影響として及んでおりませんが、今後は影響を及ぼしていくかもしれません。これらを含め臨機応変で弾力的な対応が必要です」。

区ごとに降雪量に差異があるのが札幌の特徴で、平成24年度の冬を例に取れば、豊平区の累積降雪量は494cmであったのに対して西区では775cmであった。



▲除雪事業にかかわる苦情件数の推移



▲幹線道路除雪の様子

マルチゾーン除雪によって地区に特化した除雪体制にしたため、平成24年度のような豪雪では、全体を俯瞰し、ゾーンの垣根を越えた対応が今後の課題としてあげられた。

■ 史上初めての3度にわたる補正予算

広義の除雪とは、雪を寄せる除雪と運び出す排雪の組み合わせである。グレーダーや除雪トラックによって道路脇に除雪された雪は、大型ロータリーとダンブ



▲幹線道路における運搬排雪作業

トラックによって排雪される。排雪された雪は、市内の各所（一部市外）に設けられた雪たい積場に運ばれるのだが、平成24年度は市内にあった多くの雪たい積場が満杯になり、新たに5カ所を緊急に開設した。

単に雪を道路脇に寄せる除雪に対して、排雪は80倍ものコストがかかるという。札幌では主だった道路のほとんどで市によって除雪が行われているが、排雪を同じように行うことはできない。これを補っているのが地域住民との協働による「除雪パートナーシップ制度」である。これは、道路幅10m未満の道路での排雪費用を地域（町内会）と市の両方で負担するものだ。その他の制度として町内会などで道路の排雪を行う場合に雪の運搬用トラックを無料で貸し出しする「市民助成トラック制度」がある。

除雪パートナーシップ制度を含めて、市では例年の推移から年度初めに除雪予算を確保し、それに基づいて事業を行うのだが、平成24年度は早くに除雪予算が底を突き、史上初めてという3度にわたる補正の末、総額で63億円の追加事業費を確保した。この結果、平成24年度の除雪費は213億円もの巨費となった。

補正分には地方交付税による財源措置もあるが、これが市の財政を圧迫するものであることは間違いない。

限られた予算・機材を有効に活用するためには市民の協力が不可欠と、札幌市建設局雪対策室計画課 山形文孝課長は言う。

「道路に雪出しをするような行為があると除雪の効果が失われます。豪雪だった昨年度は特に目立ちました。なかには重機を使って道路に雪が押し出されるようなこともあり、道路がすぐに狭くなってしまいう事例もありました。また路上駐車も除雪作業の妨げになります。

昨年度のように雪の量が多いと駐車している自動車を除雪車が避けられないこともあり、除雪作業の大変な妨げとなってしまいます。少ない予算のなかで万全の対策に努めておりますが、雪出しなどマナーの問題は費用増にもつながります。市民の皆様にはぜひマナーを守ってほしいと思います」。



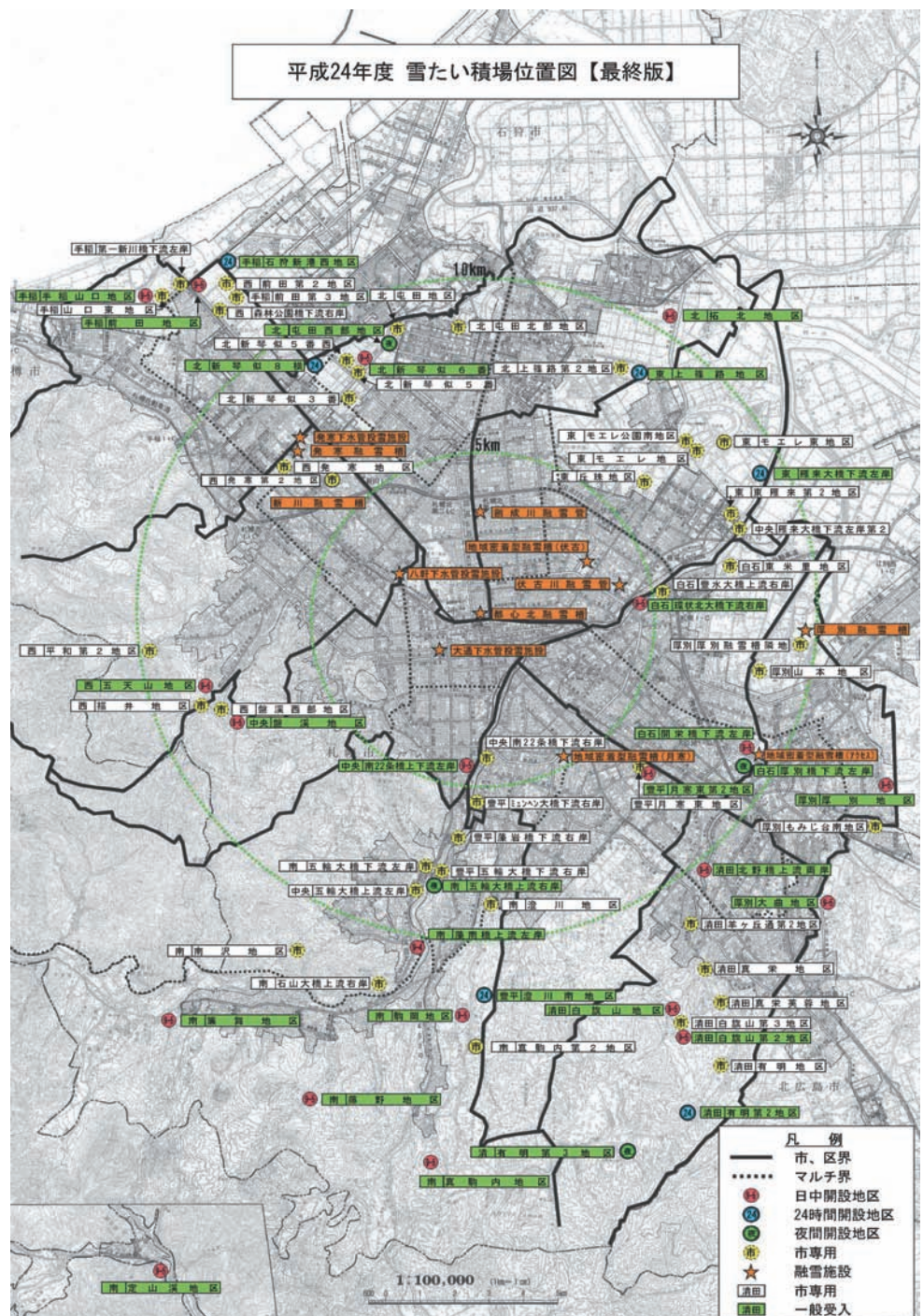
除雪機の種類

▲グレーダー

▲タイヤショベル

▲大型ロータリー

▲除雪トラック





▲札幌市が呼びかけている4つのお願い

雪との共生

雪は北国で暮らすすべての人にかかわる問題であるだけに、市民の理解が何よりも大切だ。このため札幌市では町内会に対して雪対策情報の共有化を進める「地域と創る冬みち事業」に平成17年から取り組んでいる。

これは、地域での懇談会を通して雪をめぐる課題を行政と地域とで共有していくもので、地域内で除雪や雪対策に課題のある個所を抽出してマップに落とす作業や、意見交換会などが行われている。懇談会は昨年度までに1,269の町内会で実施された。市と町内会、除雪事業者による合同パトロールや、学校のグラウンドや街区公園などを雪置き場として活用するなどの成果が生まれている。また、市民への啓発活動として「札幌ゆきだるマンプロジェクト」も行われている。これは除雪事業への市民の協力と冬の市民生活ルールの浸透を目指すもの。「子どもから親に伝えてほしい」として、



小学生を対象とした「おうち講座」「冬みちワークショップ」など、特に次代を担う子どもたちへの働きかけが強化されている。

平成24年度の大雪は、北国において雪は排除するものではなく共生していくものであることをあらためて教えた。



▲子どもたちによる冬みちワークショップの実施



◀「札幌ゆきだるマンプロジェクト」のキャラクター・ゆきだるマン



▲市民から応募のあった「ゆきだるマン」コンテスト優勝作品